

番組

(13:30)

舞囃子 呉服

(シテ) 今井 克紀

(太鼓) 前川 光範
(大鼓) 山本 哲也
(小鼓) 林 吉兵衛
(笛) 貞光 訓義

(地謡) 徳田 宣幸
宇高 徳成
廣田 幸稔
豊嶋 幸洋
山田 伊純

狂言 腹不立

(出家) 茂山あきら

(施主甲) 丸石やすし
(施主乙) 松本 薫
(後見) 増田 浩紀

(14:30頃)

能 野宮

車出之伝 合掌留

(シテ) 今井 清隆

(ワキ) 村山 弘
(アイ) 網谷 正美

(大鼓) 山本 哲也
(小鼓) 林 吉兵衛
(笛) 杉 市和

休憩

(16:30頃)

(後見) 廣田 幸稔
金剛 永謹
豊嶋 幸洋

(地謡)

惣明 貞助 廣田 泰能
宇高 竜成 種田 道一
豊嶋 晃嗣 松野 恭憲
山田 伊純 金剛 龍謹

主催 今井後援会 後援 京都新聞社

舞囃子 呉服

典拠は日本書紀。古くは呉機(くれはとり)綾織(あやはとり)とも云われ「はとり」とはハタ織りの事。渡来文化の織物技術は古来神聖視され、能でも祝言曲として機織姫が中ノ舞を舞います。「ごふく」という文字や姓の「服部」、クレハボウの名など興味深いものが残ります。

能 野宮

典拠は源氏物語榊の巻。始めにこの曲の象徴である作り物、柴垣と鳥居が後見により正面先に据えられると舞台はたちまち「野宮神社」となり、あたり一面が京都嵯峨野の秋の夕暮れ時となります。

最初一人の旅僧(ワキ)がこの神社を訪れ着座すると、次第という囃子に乗りいずこともなく一人の里女(前シテ)が登場。舞台に立った女はもの淋しく暮れ行く秋の嵯峨野を謡い、重なる我が身の衰へを歎きます。僧が不審に思い声を掛けると、今日九月七日は光源氏

がこの野宮に六条御息所(みやすどころ)を訪ねた日であり、毎年むかしを偲びこの日に神事を行う事を教えます。そしてやがて源氏との契りが絶えがちとなった御息所がついに伊勢へと下つて行った事などを語るや、実は自身はその六条御息所の亡霊である事を明かして姿を消し中入りとなります。例の如くアイ狂言(所の者)の登場で、六条御息所が野宮に移り住んだ云われなどが語られます。

僧が夜もすがら後を叩いていると、美しい車に乗った御息所(後シテ)が登場。御息所は賀茂祭り行列の源氏をひと目見ようと出掛けますが、場所取りで葵ノ上との車争いに敗れ、その屈辱と妄執を晴らして欲しいと僧に頼むのです。そして昔を偲んで美しい舞を見せ、あたりの風情を懐かしみ、一夜を明かした後、また車に乗って消えて行きます。

美しさと気品の漂う幽玄を代表する2時間の大曲です。同じシテである六条御息所が嫉妬から般若と化す名曲に「葵上」があります。

使用面は前後とも 孫次郎(まごじろう)